



青森市新町通りの夜景。新町通りと八甲通りの交差点から西側を撮影したものの。左下にネオンアーチが見える(1954(昭和29)年・青森県史編さん資料)

1945(昭和20)年7月28日の青森大空襲で、県都青森市の中心部分は焼け野原となった。戦前までネオンで明るかった県都の夜は、一気に暗闇に包まれた。安全な暮らしを維持し、犯罪を防止する観点から照明の点灯を願っていた市民は多かった。

戦後の復興が進み、街灯が設置され建物に明かりが

前身)を契機に披露された。青森市の場合、年間を通じて最も多くの人びとが集まるネブタ祭りを、催事の開催日や商店の開店日に充てる傾向が強かった。祭りが始まる数日前の7月28日は、青森大空襲9年目の記念日だった。空襲当時を思い起こしながらも、10周年を前に明るいネオンアーチを見て、青森市街地の復興と発展を確信した市民は多かったと思う。

は、格好の宣伝になる。ネオンアーチは広告塔の役割を果たしたわけだ。時代が移り変わり、ネオンアーチは老朽化故に撤去され、その後再建されることはなかった。広告的価値と資金提供の両立が難しくなったからだ。高度経済成長後の景気悪化と共に、派手なネオンや巨大な広告塔、装飾性の高い看板などが流行でなくなったことも考えられよう。

ネオンアーチ

中園 裕

(県民生活文化課
県史編さんグループ総括主幹)

灯り出した1954(昭和29)年、青森市は復興10周年を前に催事の準備に着手した。このとき中心商店街では、街に美観を添え名物にしようと、新町通りにネオンアーチを造ることになった。アーチは夜になるとネオンに明かりが灯るので遠方からも大いに目立つた。

ネオンアーチは8月の港祭り(現在のネブタ祭りの

街灯と同時に設置された。アーチの建設には酒造会社が関わっていた。青森市ではニッポンビール(途中から銘柄変更でサッポロビール)、弘前市の百石町商店街はアサヒビール、八戸市と浅虫(現浅虫温泉)駅前には清酒の桃川、三戸駅前商店街は清酒の宝峰という具合だ。ネオンは夜に威力を発揮する。アーチに浮かび上がる酒やビールの銘柄

青森市のネオンアーチは、何度かの改築を経ながら、竣工40年近く経過した1993(平成5)年7月に解体撤去された。しかし、戦後の復興から高度経済成長をへて、長い間商店街繁栄の象徴として掲げられたアーチには、郷愁の思いを抱く市民が多い。これは他の地域も同様だろう。地域を象徴する「もの」の存在は、そこに住む人々に時代や社会への強い「思い」をもたらす。その「思い」を調べて分析し、歴史的意義を加えて後世へ伝えていくことも、現代史の一つの使命であろう。